仙台教区 復興支援活動ニュースレター

4→6・45通信

発行人:平賀徹夫 編集:小松史朗 〒980-0014 仙台市青葉区本町 1-2-12 カトリック仙台司教区事務局

TEL 022-222-7371 FAX 022-222-7378 義援金振替口座: 0 2 2 6 0 - 9 - 2 3 0 5 名義:カトリック仙台司教区本部事務局

岩手県、宮城県、福島県のそれぞれの被災地を、関東の教会や学校が継続的に、また積極的に 支援してくださっています。今回は、その様子と、カリタス若林 SC が企画した夏祭り・盆踊り について、そして被災地を忘れないために、被災地巡りをされた仙台市内の一修道院のシスター たちの感謝の報告をお伝えいたします。

~カトリック碑文谷教会~

幅広い世代の信徒による被災地支援

カトリック碑文谷教会 北岡 敏朗

カトリック碑文谷教会(東京教区・目黒区)では、カトリック東京ボランティアセンター(CTVC) や福島県内のカトリック教会と連携して、福島県内の仮設住宅への継続慰問を行っています。

震災直後は福祉委員会を中心に義援金の送金などを行ったほか、青年会の若者ががれき撤去のボランティアを進めてきました。しばらくして福島の野菜販売も始めました。この奉仕は、信徒たちの被災地への思いのより具体的な活動として現在も続けられています。



カリタス米川ベースのボランティアとして 南三陸町ボランティアセンターでの活動に参加

被災地の方をサポートしたいという気持ちは信徒の誰もが持っていたのですが、東京でも震災の影響が残る中、2,600余名にも及ぶ信徒をまとめることは容易ではありませんでした。そのうち、被災地の仮設住宅で家や家族を失った方が困難な生活を強いられている状況が伝わってくるようになりました。

そこで、発災後半年の10月、主 任司祭と教会委員長を先頭に、信徒 20名で構成する一団を組成し、福島 の仮設住宅を訪問しました。

教会では1カ月以上も前から派遣メンバーの募集や食材の手当て、現地との事前の打ち合わせなど、周到な準備をしました。私たちは、この訪問から、被災地の現状を徐々に把握し、あまりにも悲惨が現状を目の当たりにすることになりました。特に家や家族を失った方が困難な生活を強いられている現実に驚くばかりでした。それでも当日は仮設住宅のみなさんとともにバーベキューをしたり、お茶を飲んでお話をしたりして、一緒に楽しく過ごしました。

被災地支援で必要とされていることは、金品の提供や若い男性しかできないような重労働の奉 仕だけではありません。仮設住宅に身を寄せるしかなく滅多に家の外に出てくることができない 方との「心の対話」も大切だと思います。この仮設住宅訪問はその後も続いていますが、訪れた のはどの回も同じ仮設住宅です。

たしかにいるいるな仮設住宅を回るという考え方もありますが、同じところに繰り返し訪問することにより、信徒と仮設住宅の方の間にきずなが生まれ、次第に打ち解けて話せるようにもなりました。「自分を忘れることなく、碑文谷教会の人がまた来てくれた。今日は楽しくて心が晴れ晴れした」と言っていただけるのは、活動を継続していく上での喜びです。また、これまで碑文谷教会からボランティアに参加した信徒の年齢は実にさまざまで、下は高校生から最高齢は80歳を超えています。



☆仮設住宅の方々との集合写真☆

このように幅広い世代の信徒が主体的に参加できるは碑文谷教会の特徴だと思います。

一方これからの活動には課題もたくさんあります。仮設住宅や被災地の状況は日々刻々と変わっています。今後も「心に寄り添う」ことは変わらないとしても、あるべき具体的な形が今後も仮設住宅でのバーベキュー提供というわけではないかもしれません。私たちは現地と緊密に連絡を取り合い、常に何が必要か考え、善意の押しつけにならないようよりよく行動しなくてはなりません。被災地を支援する気持ちの風化も食い止めなければなりません。

教会では新たに災害復興支援委員会を立ち上げ、支援活動の立案や実行サポートのほか、信徒の啓蒙・情報発信、活動参加者のすそ野の拡大にも力を入れています。福島の現状や支援活動報告を主日のミサ後にアナウンスするなど工夫もしています。活動の継続のためには今後の活動資金をどう調達するかも重要な課題です。あの3・1 1 前の放射線量に戻るには 150 年かかるといいます。息の長い支援が代々引き継がれていく事を願っています。



~いちごの絆の会~

高校生による仮設住宅お掃除ボランティア&交流会

カトリック鳥山教会

藤田 恵神父

いちごの絆の会では、7月20日(日)と21日(月)の2日間、亘理町の舘南仮設住宅、旧 舘仮設住宅で清掃ボランティアと交流会を行いました。

トラピスト修道院 (ガレット)、宇都宮海星女子学院生徒会・父母の会の後援のもと、宇都宮海星女子学院生徒 17 名と女性教諭 2 名、そして私の合計 20 名で活動しました。

ボランティアの内容は、20日は仮設住宅の窓の外側を拭く清掃活動、申し出のあった家では、屋内での窓・壁・天井などの清掃も行いました。21日は、仮設集会所で交流会を行いました。

20日に行った窓拭き清掃は、役場との話し合い通り、最初に住民の方の部屋をノックして了解を得てから窓を拭きました。ほとんどの方から「よろしくお願いします」と言って頂き、トラブルはありませんでした。また、急きょ行うことになった屋内の清掃では、もしものことがあってはいけないので、必ず教員が生徒と一緒に入るようにしました。

集会所の臨時職員の方のアドバイスを参考 に、用意した新聞紙をバケツの水で濡らして 窓をゴシゴシと拭き、その後雑巾で空拭きを しました。最初、思ったより時間がかかりま



したが、ほぼ全戸(空き家を除く)の窓を拭くことができました。

館南仮設では、2軒の方から台所回りをきれいにしてほしいとの連絡があり、持参した重曹を使って、やや本格的な油汚れを取る掃除を行いましたが、換気扇の油汚れはプロペラを取り出すことができず、周りを掃除するだけにとどめました。



旧舘仮設では、3軒の方から①窓の内側の油汚れ、部屋の壁、部屋の天井をきれいにして欲しいとの要望が出され、3~4名で対応しました。清掃が終わると、カステラやお菓子、お茶を出していただいたり、清掃中、集会所では話せない「仮設住宅は壁が薄く、隣の声が漏れ聞こえて嫌だ」というお話をされるおばあさんもいたそうです。他にも、生徒に掃除をしてもらいながら、お話をしたがっている方が何人もいると感じ、外から来た生徒ゆえに、自宅の中だからこそ話せる内容があるということを感じました。

また、窓拭きにとても感謝し、ミニトマトをビニール袋いっぱいに プレゼントしてくれたおばあちゃんや、この日のためにストラップを 作って生徒たちにプレゼントしてくださるおばあちゃんがいたりと、 驚きもありました。生徒たちからは、「おばあちゃんから何度も感謝 され、とてもうれしかった」という感想が寄せられました。『ボラン ティアは与えるだけではない、いただくものもある』ということを感 じ取った生徒がたくさんいたようです。

屋内の清掃をする中で、仮設の狭さに驚いた生徒もおり、掃除を行うことを通して仮設での生活を実際に見ることができたのは、生徒たちにとっても良かったと思います。

21日、旧舘仮設では、交流会の前に生徒数名と全戸を回って呼び込みをしたためか、参加者が多かったです。前日に窓拭き掃除をしたことが歓迎され、また会いたいと、顔を見せるお年寄りもいました。

交流会では、前回の反省を生かし、全員が用意したネームプレートを付け、最初に自己紹介を してお互いに名前を確認できるようにしたことは、よかったと思います。

交流会の内容は、ゲーム3種類(後出しじゃんけん、電流ゲーム、もの当てクイズ)とストラップ作り、そしてティータイムの予定でしたが、旧舘では、ストラップ作りをきちんと教えられる生徒が少なく、10分でできるはずが倍以上の時間がかかり、またゲームにも時間がかかって

しまったため、予定の終了時間を 10 分程度過ぎてしまいました。そのせいで、交流会終了後の掃除を仮設の方々にお任せすることになってしまい、事前の準備が不足していたと感じました。その点、舘南では待ち時間に生徒が作り方を復習していたので、予定通り進めることができ、掃除を完了してから出ることができました。

場が持たないのではないか?と心配された3つの ゲームは、お年寄りの方々の反応が上々で、生徒の華 やかな雰囲気にすっかり馴染んでいたようです。参加 したお年寄りの顔が非常に笑顔になっているのを感 じ、孫の世代の生徒たちに思わず感情移入してしまっ たようでした。



ティータイムの時間は、被災者の方とゆっくり話すことができなかったと感じる生徒が多く、 ゲームの時間配分、ストラップ作りを教えるだけの学習が必要だと感じました。

そして、舘南では、今回のボランティアが3度目の生徒と、時々手紙をやり取りしていたおばあちゃんが帰り際に泣き出してしまい、それにつられてもらい泣きする生徒が数名いました。このような親しい関係が作れたことは、活動をこれまで継続的に行ってきた成果だと思いました。

帰りはバスに乗り込んだわたしたちを見送って笑顔で手を振る方々もいて、お年寄りが満足していらっしゃるのを感じました。そして、去年も若干、男性のお年寄りが参加したと思いますが、今回は全体の 20 パーセントが男性の参加者で、男性参加者が増えていることが嬉しく感じられました。

次回の活動は、8月22日(金)に公共ゾーン第3、舘南の2か所の仮設住宅で陶芸教室を開催する予定です。



~カリタス若林 SC 仙台東通仮設住宅の夏祭り・盆踊り~ 台風 1 1 号の大雨・大風には勝てず、中止に…

カトリック一本杉教会

近藤 京子

カリタス若林サポートセンター(SC)では、仙台東通仮設住宅の夏祭り・盆踊りを8月10日(日)午後4時~7時に開催予定でしたが、台風11号の影響で中止となりました。3年連続の企画で、仮設自治会と共催で今年も大いに盛り上げるよう準備をしてきただけに、残念で仕方がありません。

年を経るごとに周りの状況が変わってきている中での企画であり、復興住宅に移られた方々、 自力で再建されて移る方、または、展望の見えない現状に不安を抱えたままの方々と、3年前と は違う皆さまの思いを込めたものとなるはずでした。



高齢の方は、なかなか決まらない不安と孤立するのではないかという、寂しさに動揺しているという話が、コーヒタイムの時の話しに出て来ます。私たちは深く入っていけないけれど、その気持ちは良くわかります。

自治会としては、夏祭り・盆踊りを延期して 8月17日(日)に再実施することになったことは良かったと思います。「夏祭り」は、集会所前の広場でテントを張り、七夕飾り・焼そば・かき氷・おにぎり等、飲物としてビール・ジュース等、そして、大正琴の演奏・カラオケ・盆踊りで盛り上げる計画をしていました。

七夕飾りの準備は、7月より毎水曜日ごとに、仮設の皆さんにもぼんぼりの花を折ってもらい、今年は吹流しと折り鶴をつけました。七夕飾りは、8月6日~8日の期間中と、8月10日の当日にも飾ることにしており、降雨に備え、仮設の人たちに上げ下ろしをお願いしました。また、今年はカラオケは生バンド(ビックベア)でと決まっていただけに重ね重ね残念の一言です。

皆さんには、焼そばの交換券を配っていたため、延期になった17日に、私たちとしては予定通り支援することにしました。しかし、カリタス若林 SC としては、メンバーの都合もあり、参加は見送ることで自治会に了解していただきました。

当日の焼そば支援は、皆さんが大勢並び楽し げな様子が見られ、自治会の玉こん・フランク フルトを美味しそうに頬張っていました。

皆さんが早く新しいところに移り暮らせるように、神さまが共にいて下さることを祈って、また、水曜日に出かけていきます。

なお、この企画は宮城県共同募金会「赤い羽根」の"思いやり"助け合い"等の助成金を活用し、 皆様の手助けの一助と成ればとの思いが込め られたものです。



被災地初体験:石巻ベース訪問記

聖ウルスラ会一本杉修道院有志

8月8日、ウルスラ会の有志は総勢8名で小松史朗神父様の運転・案内のもと、被災地を見学しました。折よく、『福音宣教』8月号に小松史朗神父様の「アンパンマンという旅人たち」と題する寄稿があり、これを学びの初めとして被災地見学の出発前に味読しました。巻末のくつうしん>欄には、「小松神父は教区の重責も震災復興のサポートも休みなく担い続けているにも拘わらず、常に被災された方や"旅人"であるボランティアへの思いをもって働かれている」とあり、このようなお気持ちがあるからこそ、私共高齢の「旅人」にも、神父様自らハンドルを握って被災地見学の労を取ってくださったのだと思い、感謝いたしました。

震災以来3年半が過ぎようとしている時、私共はようやく念願を果たし、これまでの教会のリーダーシップによって進められた復興と再起の一端を見ることが出来、更に、国内はもとより海外からの援助によって「いま」があることを実感できました。

私共は先ず、石巻ベースのすぐ前にある門脇地区の災害あとに立ち寄り、ここで犠牲になった み霊のためにしつらえられた祭壇に、供花と祈りを捧げました。前は海、後ろは崖という位置に あるこの場所は、部落全体の壊滅のあとを生々しく物語っていました。

石巻ベースでは、シスター細谷と京都教区からのボランティアさんと会い、お話を伺いました。いまでもシスターは各地からの訪問者の応接をされ、心とからだを遣う大きなお仕事をされている!と思いました。帰途は東松島の被災地の跡を訪ね、ここは2つの集落が孤立し、何日も救援の手が届かなかったという神父様のお話でした。

途中、「名にし負う松島の風景」は、今もなお、旅人の目を楽しませるに十分で、箱庭のよう な湾内の島々や松の老木の風情が、昔見たのと変わりがないように感じられたことは不思議でし た。

かつて芭蕉は、その美しさゆえに天下に喧伝された「松島」に着いた夜は、興奮のため"眠ろうとしたがなかなか寝られなかった"と書いています。神の造化の偉大さ、美しさ、そして悠久の大自然の前には、芭蕉でさえことばが出なかったという天下の名勝地"松島"を、私共も車からしばし、楽しませていただき、無事帰路につきました。感謝。

